

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2020」 入賞作品

目 次

★優秀賞

	岩崎 春香	2
堺電業株式会社	築切 佑果	3
聖心女子学院 高等科 3年	石川 遥	5
千葉大学 医学部医学科 2年	加藤 佳瑞弘	6
洗足学園音楽学園 音楽学部音楽学科 4年	成瀬 流奈	7
昭和女子大学 国際学部国際学科 3年	宮本 芽依	9
学習院大学 文学部哲学科 1年	今村 寛明	10
創価大学 国際教養学部国際教養学科 4年	阿部羅 良枝	11
立命館宇治高校 3年	高木 麻衣	12
東京学芸大学 教育学部初等教育教員養成課程音楽科 2年	片岡 奈々	14

★入賞

琉球大学 医学部医学科 5年	佐藤 樹	16
愛知国際学院 非常勤講師	山本 佳代	17
聖心女子学院 高等科 3年	任 梨紗	19
創価大学 文学部人間学科 4年	服部 大芽	20
日本大学 大学院商学研究科博士後期課程 1年	根本 萌希	21
	滝本 さやか	23
京都大学 経済学部経済経営学科 (今年卒業)	古賀 裕也	24
株式会社リクルート	笠井 光	26
聖心女子大学 現代教養学部教育学科教育学専攻	伊東 美咲	28
同志社大学 法学部法律学科 4年	有田 穂乃香	29

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2020」

★優秀賞

「頑張って」

岩崎 春香

こんなにも中国を恋しく思うようになるとは、2年前は考えもしなかった。

私は2018年7月末から2020年1月末まで、北京市にある中日友好病院国際部外来で、日本国際協力機構の活動の1つである青年海外協力隊の看護師隊員として活動していた。中日友好病院という場所柄、日本との関わりも多く、温かい同僚たちや国際部という国際色豊かな環境で有意義な時間を過ごした。何よりも、日本で言われている中国のイメージを覆す沢山の素敵な経験をし、私は中国、特に中国の方々を知れば知るほど好きになっていった。

青年海外協力隊の任国での活動は2年間、私は2020年7月末まで活動の予定だった。2020年1月上旬、湖南省にいる知人が春節遊びに来なよと誘ってくれ、南方の春節の過ごし方を体験しようと思い航空券を買った。残り半年の任期中にどんな活動をしようか、帰国したらどんな仕事をしようか、考えていた。中国でいつも通りの私の日常が、そこにはあった。その数ヶ月後に世界が本当に大きく変わるなんて、想像すらしなかった。

年明けから、武漢で発見された原因不明の新型肺炎患者さんについて、ニュースで頻回に取り上げられた。春節が近づくにつれ、病院内の緊張度が高まるのを肌で感じた。来院患者さんは全員体温検査、医療従事者はマスクとヘアキャップ着用、毎日行われる感染症専門家の院内研修、防護具の着脱練習...十分とは言えない私の中国語力でも、会話や行動から「恐怖」を感じていた。同僚から「春節の旅行はキャンセルした方がいい、北京に戻れなくなる」と助言を受け、苦渋の決断をした。春節は家に引きこもろうと決めた。1月23日、中国政府は武漢の都市封鎖を決定した。私の春節はこうして始まった。

日本国際協力機構からは「北京も封鎖するかもしれない、日本の本部から緊急帰国の命令が出るかもしれない」と言われた。今後が不透明な中、ウィチャットで武漢に関する投稿を見つけた。それは、武漢で新型肺炎患者さんの治療に当たる最前線の医療従事者の記事だった。読みながら、溢れては流れ落ちる涙を止めることが出来なかった。読み終わってすぐ、一心不乱にその内容を拙いながら日本語で翻訳し、知り合いのフリーペーパー発行元に「この内容を沢山の中国に住む日本人に届けて欲しい」と依頼した。結果としてオンラインで2500人以上の人が目を通してくれた。中国にいる日本人として、医療従事者として、私に何か出来ることはないだろうかと考え、手洗いや

マスクの付け方、咳エチケット、自粛生活の注意点をイラストにした。これも同様にウィチャット上で広めて欲しいと多方面に呼びかけた。結果、日本人中国人関わらず、多くの人に届けることが出来た。

そんな中、中日友好病院の恩師である陳さんから連絡が来た。

「明日(1月26日)、中日友好病院から武漢への緊急援助隊を出すことになりました」

私にとって新型肺炎は遠くで起こっている出来事ではなく、より近くで起こっていることに感じられた。次の日、緊急援助隊の中に国際部外来同僚の王麗麗さんがいることを知った。直ぐに彼女に中国語でメッセージを送った。

「丽丽老师，一定保护自己，一定安全归来！（丽丽さん、どうか気をつけて、無事に帰ってきて!）」返事はすぐにあった。

日本語で「頑張って」

溢れる嗚咽を止めることが、出来なかった。

2020年1月29日、日本国際協力機構の命により、日本への一時帰国を余儀なくされた。帰国後、王麗麗さんだけではなく、同僚の程金麗さんと王萍さんも武漢へ向かった。100名以上の中日友好病院の医療従事者、事務方の職員が武漢へ向かった。そして全員無事、北京に戻ってきた。

今私は新型肺炎軽症感染者隔離施設で看護師の仕事をしている。あの時の「頑張って」をしっかりと受け取り、私は自分の出来ることをしている。

また、中日友好病院で皆と笑顔で会える日を楽しみにしながら。

山川異域 風月同天

青山一道 同担風雨

運命の出会い

堺電業株式会社

築切 佑果

私は以前、湖北省の恩施土家族苗族自治州という片田舎にある大学で日本語教師をしていた。そこは湖北省でありながら、四川や重慶に近いことから、食べ物は何れも辛く、おまけに塩気も強い。山に囲まれているため、雨がとても多く、何だか気分も上がらない。地元の人々はみんな方言で話すため、一生懸命勉強した中国語も全く通じない。慣れない土地での生活に、念願かなって中国で日本語教師になれたのに、日に日に後悔の念が強くなっていった。当時の私は学生たちと打ち解

けておらず、授業以外も一人で過ごすことが多く、孤独にも拍車がかかった。

そんな私を救ってくれたのは当時一年生の学生たちだった。9月に入学した彼女たちは、簡単な挨拶やひらがな、カタカナの勉強から始めて、12月頃には日本語で簡単なコミュニケーションが取れるようになっていた。中国では大学入学試験の点数が足りなければ、地元から遠く離れた志望していなかった大学の志望していなかった学科に自動的に振り分けられる。日本人には残酷に思えるが、学生たちは口を揃えて平然と「運命だから」と答える。そんな彼女たちにとっても、親元を離れてこの町で大学生活を送ることは容易ではない。彼女たちの日本語が上達するにつれて、私たちはこの町で生活することの困難や不満を色々と話すようになった。私は今まで心の中で抱えていた気持ちを明かせたことで、ずいぶんと心が楽になった。いつしか私たちは学生と教師の関係というより、家族のような、時にはこの町を共に生き抜く戦友のようになっていった。

住めば都で、赴任して3年が経つと、この町の生活にも慣れてこの町の魅力をたくさん見つけることができた。知らず知らずのうちに学生も私も辛い料理が好物になっていた。長雨が続いた後の青空と空気は清々しい。相変わらず、娯楽はないが、学生と過ごす時間が私にとって何よりも楽しかった。湖北省の田舎町で私たちが出会えたのも何かの「運命」であろう。卒業後、学生たちは湖北省内の高校で日本語教師になったり、上海や広州などの大都市に出て就職したり、大学院で日本語の勉強を続けている学生もいる。

2020年、今年は湖北省で働いていた私にとって、忘れられない年になった。そう、コロナウイルスの流行だ。私がいた町は武漢から離れているが、大都市と比べると医療体制も脆弱だ。年始に武漢で謎のウイルス感染者が確認されると、毎日SNS上ではそれに関連する投稿で溢れた。卒業生たちは大丈夫だろうか。学生たちのグループチャットにメッセージを送ると、みんな「大丈夫」と言うが、まだ不確かな情報が錯綜していた時期で、不安だけが募った。間もなくして、日本国内でもコロナウイルス感染者が多数確認されると、学生たちはすぐにメッセージをくれた。中でもある学生からのメッセージには心打たれた。それは日本語で2000字以上の長文で、コロナウイルスが流行り始めた頃に彼女が武漢に遊びに行っていたこと、地元に戻った後、自分が感染していないか不安だったこと、中国国内における武漢への支援、日本政府や国民がコロナウイルスを軽視し過ぎていること、最後にはコロナウイルスの特徴と予防方法が書かれていた。その文面からは緊迫した状況が伝わってくる。在学中、彼女は決して日本語が得意な学生ではなかった。そんな彼女が2000字を超える長文を全て日本語で書いてくるなんて、ただ事ではない。私は事態の深刻さを痛感し、翌日にはマスクを買いに走った。マスクが日本中の店頭から消えたのはそのすぐ後のことだった。この半年間、未知のウイルス流行の恐怖や自粛生活のストレスなどに負けそうなこともあったが、学生からのメッセージに何度も励まされた。コロナウイルスが終息したら、湖北省で卒業生に会いたい。今の私の一番の願いである。

偉大なる隣人

聖心女子学院

高等科 3 年

石川 遥

私は幼い頃から中国と関わりを持っていた。仕事で数年間中国に滞在したことのある祖父から、よく中国語を習っていた。とは言っても、覚えられたのは自分の名前と挨拶くらいである。現地で起きた面白い出来事や、中国人の生活などについて話を祖父から聞き、まだ見たことのない神秘の国への創造を膨らませていたのが、私の幼少期の思い出の一つである。

初めて中国人と交流したのは、三歳から習い始めたクラシックバレエがきっかけだった。その松山バレエ団では、両国の国交がなかった時代から半世紀以上にわたり中国公演を行っている。そのため私は、先生方が中国の歌を歌っていたり、中国公演に向けた練習をしている様子を小さい頃から見えてきた。小学生になると、北京校、上海校から毎年やってくる友達を迎えるため、ロビーでの出迎えに参列させてもらえるようになった。「热烈欢迎！！」と先生方に教わった中国語で歓声を上げ、中国と日本の国旗を両手に、ぴょんぴょん飛び跳ねて歓迎すると、中国から東京まではるばるやってきた子供たちとその家族は、いつもとても喜んでくれる。私は彼らのそんな満面の笑顔を見ると嬉しくなった。両国の先生方が再会を喜んでる姿を見ながら、「なぜテレビや新聞では日中関係が悪いように書かれているのだろう、私たちはこんなにも仲が良いのに。」と幼いながらも疑問を持った。当時の私は、日中が抱える政治的また歴史的な問題についてあまりよく知らず、自分の置かれている状況がいかに貴重で喜ばしいことかよく理解していなかった。中学生、高校生になると歓迎会への参加だけでなく、北京校、上海校の子供たちのお化粧を塗るなど、お手伝いもさせてもらえるようになった。彼女たちのリハーサルを見に行った時、地道な努力がうかがえるレベルの高い踊りに圧倒され、畏敬の念を抱いたことが忘れられない。これらの経験から私の心には、中国へのある種の憧れのような気持ちが芽生えた。私が、中国の広い国土や長い歴史、伝統的な文化に興味を持った理由は、幼い頃からの、バレエという芸術を通じた友好活動にあったのである。

私には、中国語圏の友人が二人いる。一人は、バレエで一緒のクラスだった幼馴染だ。彼女は現在アメリカに住んでいるが、今でもやり取りは続いている。もう一人は学校を通じた交換留学生で、十日ほどホストファミリーとして受け入れた。はじめは英語での会話だったが、中国語と日本語を互いに教え合い、最後には両国の言葉で簡単な会話ができるようになった。彼女と沢山話した中で私が最も驚いたことは、彼女が日本の歌を、それも最近の流行曲を知っていたことだった。私も中国語の歌をよく聴くが、まさか日本語の音楽が異なる語圏の国でも知られているとは思わなかった。彼女と歌を一緒に歌った時、私は音楽を通して言語の壁を乗り越えられた気がした。話す言葉こそ違いますが、私たちは同じ人間として心を通わせ合った。生まれた国の違いなど、私たちの友情には関係はなかった。

私にとって中国とは、偉大な隣人のような存在だと思う。日本は古代から、中国に政治や文化、芸術など様々なことを学んできた。その影響は今日に続くほど大きい。私は中国に行ったことがな

いが、いつか絶対に行きたいと思っている。今年から学校の選択授業で中国語を本格的に習い始め、大分話せるようになってきた。大学生になったら中国に留学してみたい。そして文化を通じて中国という国をより深く知りたい。バレエ団の公演『白毛女』を観に行った時、物語の主人公である喜児の、どんなに辛い困難にも負けず生き抜く姿に感動したのを今でも覚えている。白毛女は、人々の協力や団結力の強さを表しているともいえる。新型コロナウイルス感染症の発生で世界的危機に直面している今こそ、国境を越え結束するべきではないだろうか。そしてその日中協力の懸け橋に、私に関わることができたら嬉しい。

「虚往実帰」

千葉大学
医学部医学科 2 年
加藤 佳瑞弘

「虚往実帰」これは弘法大師空海が「莊子」から引用した言葉である。行きは不安で虚しい気持ちだが、師や先生の教えを受け、充実した心で帰る、という意味である。この言葉には、遣唐使として唐に渡り様々な知識を日本に持ち帰ってきた空海自身の感慨が込められている。空海はもともと医薬の知識をかわれて遣唐使に推薦され、唐で最先端の医療知識を学び日本に持ち帰る役目があったという。彼は医学薬学に加えて、密教、土木技術なども習得し、その後の日本が発展する基礎を築いた人である。

私は現在大学 2 年生であり、医学を学んでいる。小学生の時に「中国名医列伝」という本を読んだことが、医学を志したきっかけである。この伝記中に、華佗(かた)という天才的な医師の逸話が紹介されていた。華佗は高い診断能力を持っていた。患者の脈や舌を診たりするだけで患者の予後を見抜き、役に立つ助言を与えた。それだけでなく、麻沸散(まぶつさん)という麻酔薬を発明した薬の達人であり、世界初の全身麻酔による開腹手術を成功させた外科医でもあった。華佗の卓越した能力に憧れた当時の私は、手当たり次第に植物をすり潰し、麻沸散の作り方についての考察を学校の作文集に載せてしまうほど、医学や生薬に関係することに夢中であった。

大学入学後、第 2 外国語は中国語を選んだ。華佗の一件から、私は中国の医学薬学に興味を持ち、中国に行って詳しく学んでみたいと思うようになっていた。ただ、大学入学まで中国人の知り合いは一人もおらず、自分が中国語を使いこなせるようになるのか不安なまま、中国語学習がスタートした。

いざ学んでみると中国語は非常に美しい言語だった。整然と並んだ漢字の列は、高校時代に学んだ漢詩と同じ形式美を持っていた。さらに声調に注意して話す場合、初めのうちはカラオケで音程を気にして歌っているような気分だったが、慣れてくると自然なトーンやリズムが馴染んできて、

心地よいメロディーを口ずさんでいるような気がしてくる。論旨の明快さも中国語の魅力の一つである。伝えたいことを対比や故事を用いて説明することが多いため、とてもわかりやすい。

中国人の先生や友人に出会えたことも大きな学びにつながった。私が初めて会った中国人は偉さんという留学生だった。彼女は中国の大学で日本語学科に通う学生で、驚くほど日本語が上手だった。お互いがお互いの母語を教え合う約束をして、私は偉さんから中国語を学び、偉さんには日本語を教えた。偉さんの指導のもと、初めは苦手だった「r」の発音も次第に上達し、私の語彙力は少しずつ増えていった。初めて会ってから数ヶ月が経過し、偉さんが帰国する頃には、私は中国語でごく簡単な会話ができるまでになっていた。そして、出会ったばかりの頃は中検4級に不合格だったが、偉さんが帰国後も学習を続け、同じ年のうちに3級に合格することができた。これは本当に大きな自信につながった。偉さんとは今でも連絡を取りあい、お互いわからないことなどを質問しあっている。

中国語を通して私が学んだことは、「虚往実帰」の精神である。新しい環境に行こうとする時、最初は誰でも空っぽで、不安ばかりが募る。しかし、学びを継続し、師匠や先生、友人から教わる姿勢を貫けば、どんな困難も乗り越えて結果を出すことができる。

未熟な私は、まだまだ学ぶべきことが山のようにある。実際に中国大陸に行き、自分の目で見て自分の足で確かめたいことがある。例えば、中国の伝統医学の理論を学び、実践してみたい。中国から遙かヨーロッパまで続くシルクロードの上に立ち、地球の大きさを味わってみたい。もっともっと中国語でコミュニケーションがとりたい。

これからはどんな時も「虚往実帰」の精神で、無邪気に空っぽの心で歩いて行こう。出会った人のご縁を大切にしよう。学びを深め、満ち足りた足取りで帰ってこよう。

可遇不可求

洗足学園音楽学園
音楽学部音楽学科 4年
成瀬 流奈

これは、私に初めてできた中国人の女友達が教えてくれた言葉だ。私は彼女のことを親愛の情を込めて「姐姐」と呼んでいる。姐姐は日本文化と日本語に興味を持ち、地方の国立大学で日本語学を専攻する留学生だ。かたや私は関東の音大に通う音大生で、何の接点もないように思える私たちが、ふとしたきっかけからSNSを通じて知り合った。

私にとって「中国」は行ったことのない遠い国でありながら、どこか懐かしく親しみを感じる不思議な国だ。桃花源記などの文学、福建土楼などの建築物、漢服や伝統音楽はもちろん、現代のC-POPや華流ドラマなど、多方面で私の琴線に触れ「もっともっと深く知りたい」と思える国なのだ。

姐姐は幼い頃にテレビでウルトラマンを見て、すっかりファンになったという。中国語吹き替えでの視聴だったため中国の作品だと思っていたウルトラマンが、実は日本のテレビ番組だと知って「どうしても日本に行ってみたくて思ったのが始まりだった」と話してくれた。互いが互いの国の文化に興味を持ち、もっと知りたいと思っていた私たちが親しくなるのに、そう時間はかからなかった。しかも彼女の日本語は上級レベルに達していて、コミュニケーションには全く苦労しなかった。そして

私は音大でヴァイオリンを専攻しており、彼女は二胡を演奏し、互いに弦楽器が大好きで、他にも驚くほどたくさんの共通点があった。彼女が「あなたはもうひとりの私みたい」と言うので、2歳年上の彼女を私が「姐姐」と呼ぶようになったのだった。

ある日、姐姐が大学の授業で出された課題のレポートを書くのに苦慮している、と言ってきた。それは「人称と可能表現の関係について」というテーマだった。何と難しい課題、と私は思った。普段何気なく使っている日本語。文法なんて全く意識しなくても会話には困らない。というか、高校での授業以来、日本語についてそんなに深く考えたことはなかった。恥ずかしながら私は、その場ですぐ何か答えることはできなかった。そこで色々と調べ、自分なりにアドバイスをした。すると彼女は「助かった」と喜んで、とても感謝してくれた。でも、そのとき私は思った。感謝すべきは自分のほうだと。確かに姐姐のために調べたことではあるが、彼女に言われなければ私がこんな風に日本語と向き合うことはなかった。そして姐姐のために調べたことが、同時に私の中にも新たな知識としてアーカイブされたのだから。

私はヴァイオリンの他に楽曲制作も学んでいるのだが、姐姐との交流に刺激を受けてか、インスピレーションから何となく中国の雰囲気を感じた歌が出来上がった。試しに姐姐に聴いてもらおうと、その楽曲を送ったところ、何と彼女が中国語の歌詞をつけてくれた。まさか歌詞を考えてくれるなんて思ってもみなかったのも、とても嬉しかった。日本語で韻を踏んでいるところはきちんと中国語でも韻が踏まれていたし、何より歌詞だけ送られて来たにも関わらず、音にピッタリはまったので、中国語学習初心者の私にもすんなり歌えたことが驚きだった。完成した曲を私が歌うと「半分くらいはそれらしく聞こえる」と姐姐は言った。やはり中国語の発音は難しい。でも姐姐が私と何となく日本語で交流できるように、私も不自由なく中国語でコミュニケーションできるようになりたい。私たちは勉強や趣味のことだけでなく、ジェンダーや環境問題など様々な事柄をテーマに、互いの話を聞き、意見を交わしている。姐姐は私の話にしっかりと耳を傾けてくれるし、私も彼女の考えを聞きたい。昔、日本と中国の間になにかあったとしても、現代の双方の国の偉い人たちがどんなことを言い合っているとしても、私たちには関係ない。

私たちは「可遇不可求」の仲なのだ。努力したからと出会えるわけではない、出会うべくして出会えた相手。中国への思いと同様、私は姐姐との出会いを、一生ものだと思っている。

新年早々、新型コロナウイルス感染症拡大という不意の事態に見舞われ、それはあっという間に世界を席卷した。パンデミックの下、人々の仕事や生活等、すべてのことが新しいスタイルに変わっていく。こうした変貌しつつある社会状況に応じて、私もこれまでに経験したことのない斬新な学習・生活を始め、様々なチャレンジを試みた。

私は昨年9月に上海交通大学に留学し始めた。冬休みに入った今年の1月に成人式に参加するため一時帰国をした。元々冬休みを終えたら上海に戻る予定だったが、思いもよらず、コロナの脅威で国と国の間は隔絶の状況に陥ってしまい、私は日本に残らざるを得なくなった。

新学期の始まりはやや遅れたが、3月2日、私は上海交通大学のオンライン授業に参加し、「留学」を再開した。最初、中国に戻れなくなったという現実があまりにもショックで、オンライン授業という名の「留学」を受け入れることができなかった。「これでも留学と言えるのか」、自分に何度も問いかけた。ところが、幸いなことに先生たちは、非常に熱心で、工夫を凝らし、授業を展開していった。私は、全力で勉強に努めることができた。だんだんオンライン授業にも慣れ、すきになり、学習成果も予想を遥かに上回るほどだった。

それにしても、オンライン学習はやはり中国に身をおいての留学とは違う。なんといっても、授業は対面ではないし、環境も大いに異なるからである。そういう心配もあり、私は、昼は上海交通大学のオンライン授業、夜は複数の日中言語交流コースに参加し、中国人と中国語でコミュニケーションをし続けた。また、ほぼ毎日新華社通信や上海交通大学のホームページ等を検索し、中国、そして母校上海交通大学の動向、情報を得続けた。さらに、ネットで中国の映画やテレビ番組を見、中国の音楽を聞き、映画と音楽をはじめ、身にしみて中国の文化を体験し続けてきた。

上海交通大学の存在は私の脳裏に焼きついて、離れがたい。母校に何かできるかと私は考えた。実際、私は2020年度の「上海交通大学友好使者」に選ばれた。この使命を果たすため、本来、私は1月の一時帰国を利用して、日本の複数の高校に訪問する予定であった。しかし、コロナの影響で、この活動を実施するのが難しくなった。そのような状況下、私の出身校——白鵬女子高等学校の恩師と連絡を取ることができ、同高校で交流活動を行う事となった。1月24日、私は白鵬女子高等学校で30名ほどの高校生を対象に、中国語と世界、留學生活等について報告を行い、関心が寄せられた。この報告会の反響がよかったか、6月に入って、恩師から突然連絡があり、同月26日に同高校の50名余りの学生向けに、Zoomで2回目の報告会を実施した。その後、私の話を聞いて、進路を変更した学生がいたことを耳にした。自分の母校が二つ、国を超えてつながったような気がした。

このほか、私は中国語を学ぶメリットや上海交通大学の魅力、留学プログラム等を紹介する「名門上海交通大学」という動画を制作し、5月4日にYouTubeで公開した。少し素朴な動画ではあるが、意外にも、様々な人から質問や励ましの言葉を頂いた。まさに使者になった気分だ。

外出自粛の状況の中で、私がチャレンジしたもう一つの挑戦は、中華料理を作ることである。私はネットで本場の中華料理のレシピを探し、「麻婆豆腐」や「魚香肉絲」等を作ってみた。最初は火

加減等がなかなか把握できなかった。失敗を重ね、今は少しずつ上達し、作った餃子もそれらしくなった。

この半年間の間に、新型コロナウイルス感染症拡大と戦いながら、私はオンライン授業と様々な実践を通して、中国語を上達させることができた。そして、留學生活の大事さを痛感しながらも、中国のことをさらに知ることができた。大好きな中国に、その身はないが、私の心はまるでまだ、中国にいるかのようだ。中国との私の心の距離はグッと縮まった。

「ふたつの苗字」

学習院大学
文学部哲学科1年
今村 寛明

私には苗字がふたつあります。「今村」と「董(ドン)」というこのふたつです。

「今村」という苗字は私が日本人であることを表す苗字です。日本で生まれて、日本で暮らしている私は当然ながら「今村」と名乗って生活しています。戸籍にも「今村」という苗字で登録されています。しかし、もうひとつの苗字、「董」に関しては滅多に使うことはありません。この苗字は私に中国の血が入っていることを表すからです。

中学、高校を通して、私は日本と中国のハーフであることを友達にあまり打ち明けていません。打ち明けたとしても、それはごくわずかいる心許せる友達にのみでした。その友人にすら、自らの環境を深くは話していないのです。日本で暮らし、日本語を使っている者が突然、中国の匂いを出すこと。この事に対する、言葉では言い表せない微妙な緊迫感というものを、私は自らの肌を通して感じていたのです。私は度々思ったものです。冗談めかして中国排斥を唱える友人に「僕は中国とのハーフだよ」と言ったら、どんな顔をするのだろうと。この微妙な緊迫感から、私は自らの身体に中国の血が入っていることを隠して生きてきたのです。

自分が置かれている環境に対して違和感を持ったのは、中学の頃からでした。日本に生まれて、日本で育った母子家庭の私。それなのに、母の実家で飛び交う言葉はほとんど中国語です。正月やお盆などの特別な時間に集まる親戚もまた、中国語を使っていました。そうして彼らはみな、大きく笑い合っていたのです。この強烈なエネルギーに違和感を持った私は母に尋ねました。

「どうして日本にいるのに中国語で喋っているの？」

母は優しく、そして力強く、私にはっきりと言いました。

「私たちは、中国残留孤児の子なんだよ。」

中国残留孤児というのは、第二次世界大戦末期の混乱の中、日本への引き揚げが叶わず、中国に残留せざるを得なかった方々の事を指します。私の曾祖母がその当事者で、私の母はその三代目となります。残留孤児の歴史は、あまりにも劇的です。残留孤児に関わるひとりひとりに、一本の映画が作れるほど濃密で、悲惨なストーリーがあります。私の母も、そして祖母の家に集まる親戚

の一人一人も、筆舌に尽くし難いほどの過去がありました。

母は中国東北部、ハルビン市に生まれました。当時の生活は決して裕福なものとは言えませんが、幸運なことに、苦しい経験をした記憶はあまり無いそうです。時折笑顔を見せながら当時の苦労話を話していました。しかし、小学生の頃、残留邦人の祖母(私にとっては曾祖母)に連れられて日本に来てからというもの、各地を転々としては、日本語も上手に話せず、辛い思いをしたと神妙に語りました。母はぼつりと言いました。私たちには家族しか仲間がいないんだよと。そう語る母の目は、遠くにある故郷を見つめているようでした。そして私は、「今村家」または「董家」にみなぎるエネルギーの源がわかったような気がしました。彼らの活力は、悲惨な経験に裏打ちされていたのです。悲惨な経験は孤独を生み出します。ここにいる親戚達も、私が自らの「董」という苗字の存在を隠したのと同じように、心の奥底に確固として存在する孤独を感じていたのでしょう。その孤独感を互いに分かち合っていたからこそ、互いに笑い合うことが出来たのです。

その事がわかってから、私は中国という国に対して、強烈な憧れを抱くようになりました。私は、中国という未知なる故郷に行ってみたいと思うようになりました。そして中国人としての自分に誇りを持つようにもなりました。私はハーフとして生まれました。「今村」であるとともに「董」としても生まれました。そのことは実に私の運命だったのです。天は我々に運命という道を用意しますが、その道をどう進むのかは我々の脚にかかっているのです。運命に目を背けてはいけません。中国は私にそう教えてくれている気がしています。

想いを紡いで

創価大学
国際教養学部国際教養学科 4年
阿部羅 良枝

89歳になる私の祖父が、幼い頃繰り返し話してくれた戦争体験の中で、ひと際印象に残っているものがある。終戦の2か月前に満州へ渡った祖父は、日本の敗戦を中国の地で耳にした。絶望に暮れる間もなく、生きるための闘争が始まった。誰もが苦しい生活を送る中で、敵である祖父らに食べ物を恵んでくれる者など誰もいなかったからである。働きたいと懇願したが「日本小孩、不要不要！」と、何度も何度も繰り返し追い返された。当時の祖父は現在の私より幾分も歳が若かったが、生きるために必死で中国語を覚えたそうだ。

「日本小孩、不要不要！」思えば、この言葉が私の人生の中で初めて耳にした中国語だった。意味は全く分からなかったが、やたらと耳について離れない不思議な音律に、自然と興味が湧いた。年を重ねるにつれて、その思いは段々、語学的な興味から中国そのものへの興味へと変化していき、大学二年の夏休み、私はついに、かねてから願っていた中国大連の大学に1か月間の短期留学に行く機会を得た。旧満州の玄関口として栄えた大連は、潮の香りをまとい、少し懐かしさを感じさせる町だった。中国の生活にも少しずつ慣れてきたある日、共に研修に参加していた先

輩の紹介で、現地で日本語を勉強している中国人の友人に出会った。日本が大好きだと語る彼らは我々を盛大にもてなしてくれ、初めて会ったとは思えないほど、私は彼らに対して強い親近感を抱いていた。

そんなある日、先輩たつての希望で、旅順という街に出かけることになった。日差しが照り付け、近年まれにみるほどの猛暑を記録していたその日、我々は中国人の友人の車で、旅順刑務所に向かっていた。旅順刑務所は日露戦争の際にロシアが建て、のちに日本軍が拡張し、日本の政治犯や共産党員を収容していた実際の監獄を改築したもので、なかには当時拷問をする際に使われていた道具や処刑台が展示されていた。英語、韓国語、中国語で記された悲惨な歴史を目に焼き付けながら、私の心には黒い錘がたまっていった。縮まったと感じていた中国人の友人との関係が崩れていくような不安に駆られた私は彼らの横顔をただ見つめることしかできなかった。本当の意味で戦争に勝ち負けは存在しない。戦争を始めた時点で、両国ともにそこに暮らす人々にとっては負けであるからだ。そう考えれば、負の遺産を背負って生まれた我々は、皆が被害者であると言える。しかし、その時の私の胸にはただ、目の前の友人の大切な祖国を傷つけたことへの謝罪の念と、戦争への恨みだけが募っていった。重い足取りで展示を見終えたとき、一人の中国人の友人が口を開いた。「戦争は憎い。日本兵も憎い。ただ、今の僕たちに出来るのは目の前の日本という国を愛することだと思う。」くらくらするほどの熱気の中で、頭を殴られたような衝撃を受けた。目の前にたたずむ彼は、あらゆる負の歴史を背負う覚悟を決めたうえで、今ここにいる私たちと誠実に向き合おうとしてくれている。その事実がどうしてもなく私の胸を熱くさせた。75年経っても消えない戦争の傷跡を癒してくれるような希望を彼の言葉に見た思いだった。そのあと私たちは海沿いをドライブして、日が暮れるまでたくさん語り、笑いあった。

かつて祖父は戦う為に中国へと渡り、生きるために言葉を覚えた。今、21歳の私の夢は日中友好の懸け橋を築くことである。70年以上前に祖父も見たかもしれない大連の町の夕焼けはとても美しかったが、波打ち際には、言いようのない切なさが押し寄せていた。しかし同時に私の胸にはこの研修で得た大きな希望と学ぶ意欲が燃えていた。「日本小孩、不要不要！」今は意味がわかるこの言葉。こんな言葉が二度と使われない世界を創るため、私は今日も中国語を学ぶ。

@Japan わたしと中国 漫画と日中間の歴史問題

立命館宇治高校

3年

高木 麻衣

日本と中国では歴史問題の捉え方が違うと思う。例えば、私達が普段何気なく見ている漫画でも中国人にとっては歴史問題を軽視しているように捉えられることもあると最近実感した。

私は、「僕のヒーローアカデミア」という漫画が好きだ。この物語の始まりは中国で発光する子どもが生まれたという設定で繰り広げられていく。それ以来各地で超常現象が報告され、世界総人口

の約 8 割がなんらかの個性と呼ばれるものを持ち始めた。ある人は超パワーを持ち、またある人は空を飛べる。逆をいえば、約 2 割は無個性と呼ばれ、なんの個性も発現しない。この世界では、個性を悪用するヴィランが生まれ、またそれを取り締まるヒーローという職が脚光を浴びた。この漫画は、ヒーローに憧れた 1 人の無個性の少年がトップヒーローを目指す物語だ。しかし、この漫画が突然一部の中国人から批判され、炎上した。もともと、中国でも高い人気を誇っていたため、私は驚いた。

なぜ、批判されたのか、それはこの漫画に出てくるヴィランの中でも1番上の組織に位置するドクターと呼ばれるマッドサイエンティストの名前が関係している。彼は謎が多く、氏子達磨という偽名を使い、個性も本名も伏せられていたが、最終決戦に近づくにつれ、このキャラクターの名前が「志賀丸太」で無個性だと判明した。このことに中国人は不快感を抱いた。なぜなら「マルタ」とは日本軍の 731 部隊で実験に使われた人々を指す隠語であり、また「志賀」という言葉も赤痢病の発見者の名前を想起させると中国人は捉えたからだ。人体実験をするこのキャラクターに「志賀丸太」という名前をつけたことにより「配慮が欠けている」「謝罪しろ」などの非難の声や罵詈雑言が相次いだ。それに対し国内のファンは「海外の文化の常識を押し付けるな」「不快なら読まなければいい」と返し、SNS 上で言い合いになった。さらにこの論争はヒートアップし、中国人が僕のヒーローアカデミアの漫画やグッズを燃やしている動画を投稿すると、日本人はコロナウイルスが広まったのは全て中国のせいだと不毛なやりとりを繰り返す。もはや、歴史問題から、日頃のストレスを言い合う場となってしまった。これを受けて作者と週刊少年ジャンプは謝罪し、名前の変更を行うと述べた。しかし、この対応に国内では更に批判の声が上がり、中国では当然の対応だと意見が分かれる結果となった。

私がもう一つ驚いたことは、日本人のコメントが「そもそもマルタがそのような意味を持つと知らなかった」などの歴史問題を認識していない発言が多かったことだった。実際私も高校 2 年生の時に初めて学んだが、多くの日本人は学んだことを忘れてるか、そもそも学んでいないのだとコメントから分かった。私達は、歴史を学ぶことで過去の教訓を得ることができる。そして、被害者のためにも日本人が何をしたのかを知ることは、過去の過ちを忘れないことや罪を償う意味でも必要だ。しかし、私達は今、課題や受験のためだけに知識を詰め込み、終わればすぐに忘れるような勉強法をとっていると思う。だから「マルタの意味なんて知らない」などと投稿し、中国人の心を深く傷つけるのだ。中国人にとっては、731 部隊は最悪の過去であり、当然知っているべきものだと思うが、日本人で知っている人は多くないだろう。ここで日中間の歴史認識に差が出てくる。私は、日本が被害を受けた歴史ばかりを学ぶのではなく、どこの国にどれほどの悲惨なことをしたのかを教えることが必要だと思う。

最後に、中国人と日本人が互いに歩み寄り、共通の歴史認識を持つ努力をし、時に反省することで、漫画という素晴らしい文化を読む楽しみや感動を共有できるようになると思う。私達は、対立するのではなく、両国の過去や文化の違いを受け入れて、前に進む方法を探すことが必要だと思う。

まさきおっちゃんの中国だより

東京学芸大学

教育学部初等教育教員養成課程音楽科 2年

片岡 奈々

3年ほど前のお正月、親戚の集まりで私は自分の耳を疑うような叔父の発言を耳にした。

「おっちゃん、この春から中国で働くことになったんや。」

一瞬固まった私の口から「え、中国地方の方じゃなくて？広島とか岡山の」と出たが、叔父は「CHINAの方や。」と私の動揺をよそに淡々と答えた。

突然そんなことを言い出した叔父に親戚みんなとても戸惑ったのを覚えている。

私は外国に行ったことがなく、外国に関する知識もないため、今まで叔父が海外に出張すると聞くたび心配になっていたのだ。

それが今度はいつ日本に帰れるのか分からない単身赴任。

当時、私は「中国って日本と近いけど、治安悪いって噂とか環境もよくないって聞くから…。」と思っていた。

不安は残るばかりだったが、その年の春は容赦なく、そして例年通りやってきた。

旅立つ叔父に何かお守りのようなものを…と考えはしたが、もう会えないというわけでもないし大げさなような、そして大の大人にプレゼントできるお財布事情でない不安。それを、改まって何かをする小っ恥ずかしさが後押しして結局何も渡せなかった。

叔父が中国へ渡り、数日後から始まったのが親戚 7 人のチャットグループでの写真付きの近況報告メッセージだった。

そこに映っていたのは、これから住むことになる天津のマンション、高層ビルが立ち並ぶ中国の街並みや、ちょっと小洒落た中華料理、それから見たこともない食材や料理が並ぶ屋台、壮大な絶景が広がる万里の長城などなど。それらは、真っ白だった「中国」とカテゴライズされた私の脳内のキャンパスに、次々と色をもたらしたのだった。

ほどなくして、その叔父の近況報告メッセージのチェックは私の日課になった。

その日食べた中華料理、出張先の成都や瀋陽などの風景、太極拳をする街の人々や、何気ない街の風景。

日によって送ってくる写真は様々だったがそのどれもがとても新鮮で心躍らせた。

家族みんな、地図帳に印をつけたり、都市について調べたりと叔父のメッセージに興味津々だった。

叔父のメッセージはとても丁寧だ。写真に映っている地域の地図上での位置、その地域と日本の関係、その土地の特徴など、沢山の情報を添えて送ってくれる。

おかげで私は日本にいながら、ネットで見るとは少し違った叔父からの視点で見た中国や、中国での生活に触れることができる。

もっと中国について知るために最新の中国のニュースをチェックするようになった。

叔父のメッセージにある都市が、私の高校の世界史の授業で出てきた地方だった時などは、さも行ったことがあるかのような物言いで「私、広州知ってるよ。清朝の乾隆帝がさ…」と偉そうに家族に自慢したりもした。

そんな私も大学に入り、第二外国語は中国語を選択した。

「私、大学の第二外国語、中国語にしたよ！授業で中国語沢山勉強して、中国に遊びに行くね！」

そう叔父に伝えると、

電話越しに「そうかあ～楽しみやなあ～」と嬉しそうにしている叔父に私まで嬉しくなった。

今現在中国に行くことは厳しいが、いつか必ず行ってずっと画面越しに見ていた中国をこの目で見て、この肌で感じたいと思う。

その時は私の「中国」のキャンパスがもっと鮮明に、賑やかになることだろう。

まだ私が5歳だった頃、家族で動物園に行った。

そこで初めてパンダを目にした私は、釘付けになり、先に行く母と離れ迷子になった。

泣きじゃくる私に手を差し伸べ、家族みんなの元まで導いてくれたのは叔父だった。

「迷子になったとき、誰が見つけてくれたんや？」と意地の悪い笑みを浮かべながら聞いてくる叔父に、「……………まさきおっちゃん。」と私は言わされ、家族はそれを見て笑っていた。そんな思い出に耽りながら、今夜も叔父がその動物園で買ってくれたぬいぐるみを抱いて眠りにつく。

まさきおっちゃんはいつも私を色々な場所に導いてくれる自慢の叔父だ。

次はどんな中国だよりが送られれてくるのだろう。

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2020」

★入賞

「ブカン」と「フクシマ」

琉球大学
医学部医学科 5 年
佐藤 樹

私が中国に興味を持ったきっかけは、多くの中国好きがそうであるように、三国志である。これまで吉川英治氏の小説から始まり、関連図書を随分と読みあさってきた。その過程で他の中国古典にも興味を持ち、今も節操なくあれこれと手を伸ばし続けている。このような経歴からすれば、書籍の舞台である中国という国に興味を持ち、実際に自分の目で見てみたいと思うことは自然なことであった。

そして今年の夏、友人が中国の大学の修士課程に進学することもあり、ついに十数年来の希望を叶える予定だったのだが、残念ながら白紙に戻ってしまった。理由は言わずもがな、COVID-19 の流行である。

武漢という名前をニュースで耳にした時、最初に思い浮かんだのは当然、黄鹤楼である。中国古典好きとしては、何度も焼失や倒壊と再建を繰り返し、孫権の時代から様々な書籍に登場することの武漢のシンボルを知らないはずがなかった。そもそも武漢の属する湖北省は、三国志の舞台となった名所が多数存在する三国志好き垂涎の地域であり、私は武漢や湖北省に対して良い印象しか持っていなかった。この印象は COVID-19 の流行があった今でも変わっておらず、それだけに日本で「武漢ウイルス」などといった言葉が見られるようになったとき、私はひどく残念な気持ちになった。ウイルスというマイナスのイメージが、武漢という地名に完全に結びつけられてしまうという懸念もそうだが、それ以上に「ブカン」という言葉が日本で蔑称のように扱われることが悲しかったのだ。

思えば、似たようなことは以前から対象を変えながら行われてきた。最も記憶に残っているものは東日本大震災の時の「フクシマ」という言葉の扱いだ。当時は原子力発電所の事故や放射線の被害を揶揄して、「フクシマ」という言葉に悪意が乗せられることが国内外を問わず多々あり、中国ネットでもかなり使用されていた。当時栃木県に住んでいたこともあり、近県である福島県のことを私は身近に感じていて、それだけに「フクシマ」が世界中で蔑称として用いられていたことに対して、とても悲しい気持ちになったことを強く覚えている。

「ブカン」と「フクシマ」

経緯は違えども、行われていることも、私が抱いた感情も、全く同じであった。

相手を知ろうとせず、理解せず、自分は関係ないと行動し、あるいは悪意を持って相手に接すれば、何度でも歴史は繰り返し、いつしか自分に返ってくる。今回の COVID-19 の流行は、日本と中国の間で立場を入れ替えさせて、私たちにそれを証明してみせた。

国も話す言葉も違えども、相手は同じ人間であり、同じように自分の故郷を愛している。だからこそ自分の故郷を貶されれば悲しくなり、褒められれば当然嬉しくなる。国家同士の立場や関係にとられると、私たちはしばしば、こういう基本的なことすら忘れてしまう。

しかしこれはある意味ではチャンスなのかもしれない。お互いが被害者と加害者を経験し、相手から心ない仕打ちを受けることの辛さ、悲しさを経験した今だからこそ、分かり合えるものがあるはずだ。

私たちは一人一人背景も価値観も違う。同じ日本人でもそうなのだから、国を跨げばその違いが大きくなるのも不思議ではない。だから、いきなり相手を完全に理解するべきだとは言わない。まずは相手についてよく知るところから始めていくべきだ。例えば私のように、魅力的な中国古典から知っていくのも1つの手だろう。きっと中国に対する見方が変わることと思うし、教養も身につくし、何より私自身も同好の士が増えて嬉しい。まさにいいことづくめだ。

残念なことに今の日本では、中国に対して良い印象を持つ人が少ないのが現実だ。しかしながら中国に対して「印象がよくない」と答える人が多いことは、これからの両国の関係にとって希望であるとすら私は思う。好意の反対は無関心であり、嫌悪は意外なことで好意に変わったりするものなのだから。

あの日の歌-未来へ-

愛知国際学院
非常勤講師
山本 佳代

初めて中国を訪れた時、Kiroroの「未来へ」が原曲のまま流れてきて、驚いた事を覚えている。この曲が中国語でカバーされていた事は知っていたが、まさか日本語のまま天津市内のスーパーで耳にするとは思わなかったからだ。

多くの日本文化に興味関心を持ち、積極的に取り入れる中国人を凄いと感ぜたし、日本の文化が広く一般の人々まで浸透している事が嬉しかったし、誇らしかった。

この出来事を日本に帰って、友人に話すと意外な反応が帰って来た。「パクリでしょ」という、心な

い言葉が帰って来た。著作権の問題があるのかもしれないが、私の反応と大きくかけ離れたものであり、ショックを受けた。良いものは良いものとして、互いに認め合う事ができたらどんなに良いものか。

日本でも中華料理をはじめとして、中国文化は広く一般に浸透している。しかし、伝統的な文化に対して、現代的な中国カルチャーはメイドインチャイナ＝粗悪製品といったイメージからか、好意的な印象は少ないように感じる。少なくとも日本の街で、中国のカルチャーに触れる事はないだろうとこの時思った。

それから 10 年近くの月日が流れた。グローバル化が進み、劇的な経済発展を遂げた中国の影響力が世界的に強まっているように感じる。この間、私自身も結婚し、子供が生まれて母親になる等、大きな変化があった。

時代のうねるような変化の中、訪日中国人観光客の増加や SNS の発展もあり、気軽に中国の友人と連絡が取れるようになった。どこか近くて遠い国と感じていた、中国をより一層身近に感じられるようになった。ただ、身近になればなるほど摩擦が増えるのか、アンチ中国という人の増加も感じている。

中国に対して、理解と警戒が進むような状況下で「新型コロナウイルス」が発生し、被害が拡大していった。春節休みを利用して、名古屋に遊びに来てくれた友人がウィルスの影響で急遽帰国した事で、事態の深刻さを知ると共に、「何かできないか」という思いが胸に宿った。

家族と相談して、マスクを買い集めて、中国に送る事を考えついた。1 月下旬にはすでにマスクの購入制限があり、幼い娘を連れて、近くのスーパーや薬局、コンビニ約 30 件を周りマスクを買い集めた。

こうした「想い」は私達だけのものでなく、日本全国から「武漢加油」の声が上がった。大阪の道頓堀では、簡体字の応援垂れ幕が掲げられ、マスクなどの物資が次々に中国に送られる等、支援の輪が広がって言った。

これまでの災害支援等は政府主体で救援隊の派遣や支援金等の活動が中心であったが、今回は個人や地方自治体、民間団体がそれぞれ、支援を打ち出した事が印象に残った。また、中国からの日本の支援も同様で、日中の絆を確認する機会となったし、純粹に同じ事を思い行動に移してくれた人が沢山いた事が嬉しかった。

ここ数年で中国製スマートフォンが流通・普及したり、アリペイや WeChat ペイが日本中のコンビニで使えるようになるなど、中国の最新カルチャーが日本に入ってきた。中国で定着したキャッシュレス決済は日本でも普及が進みつつある。

10 年前には考えられなかった世界が今、眼下に広がっている。今度は日本が中国の優れた最新技術や文化を積極的に取り入れていくべきだと考えている。そして、日本と中国は協力して新たな価値観を創出し、両国から世界に向けて新しい文化を発信していけたらと思う。

いつの時代も時計の針は前にしか進まない。「未来へ」向けて、日中が共に歩む事で、コロナウイルスも必ず乗り越えられると思う。また、今回支え合った絆が私たちの世代から子供達の世代へと受け継がれ生まれ、友好の輪が更に大きくなると信じている。

こんな事を考え、思い描きながら、今はまだ難しいかもしれないが、中国の友人達との再会を心待ちにしている。あの日、中国で聞いた日本の歌を口ずさみながら。

「私は任梨紗です。」

聖心女子学院

高等科 3 年

任 梨紗

明天見！拜拜！今日も携帯のラジオアプリから流れる彼のこの言葉を聞いて、学校の宿題やら受験勉強やらでよく開くようになったパソコンをシャットダウンした。シャワーを浴びて、スキンケアを済ませ、単語帳を手にベッドにもぐりこむ。そうして、単語帳の字がかすんで見えるくらい目が開かなくなってきたら眠る。これが高校三年生の私のルーティーンであるが、その前に私の自己紹介を聞いてほしい。

私は俗にいう在日コリアンである。日本で生まれ、18 年間日本で育ってきたが韓国の名前で生きてきた。4 歳の時、現在住む町に引っ越してきたが、その際に大量のヘイトメールがポストに投函されていたことは鮮明に覚えているし、小学 3 年生の時に「何人？なんで変な名前なの？」としつこく尋ねられたことは複雑な気持ちになったことを思い出す。私は、そんな自分の名前を、自分のアイデンティティーをいつも憎んできた。日本で生まれて日本で育っているのに名前が外国のものだから、となぜ線を引かれてしまうのか。

そんな気持ちのまま高校に入学した私に、転機となる出来事が起こった。中国との出会いである。先生が毎度、重要人物のコスプレをして授業をしてくれるために世界史の授業が好きだった私は、その日もいつものようにノートにメモを取っていた。先生は、始皇帝のコスプレをしながら、中国史の余談として現在の中国がいかにか多民族国家であるかについて話してくれたアジアには単一民族国家しかないと思っていた私にとって、中国国内において 50 以上の民族がそれぞれの文化を残したまま暮らしているという事実は衝撃的なものであった。案の定先生の話は頭から離れず、家に帰ってパソコンを開いて、検索をかけた。そうすると、日本の約 26 倍の面積を誇る広大な国土に 56 の民族が暮らしていることがわかった。海を渡ればそこには少数民族を含む 56 もの民族が共存しあう国が存在しているのである。私の中で自分のアイデンティティーに対するネガティブな感情が薄れ始めていった瞬間だった。日本でも他民族が共生するというビジョンが見えたからであろう。

その後、時を経るにつれ私の関心は中国の音楽へと移り変わっていった。もともと K-POP が好きだった私が応援していた推し(特定のアイドルグループ内で 1 番好きなメンバー)が中国人であったのだ。彼は吉林省出身の朝鮮族であった。ある日、彼の生配信を聞いていると、とある韓国人ファンが彼にこんな質問を投げかけた。「あなたは、中国人なの？朝鮮人なの？」私は、コメントを打っていた手を止め彼の返事を待った。実際、韓国において在日韓国人があまり良い印象を持たれないのと同じように、在中韓国人なども同じような扱いを受けると聞いたことがあったからである。しかし、彼はいとも簡単にこう答えたのである。「僕は、黄仁俊だよ。」そしてこう続けた。「君は僕になんてほしかったのかわからないけれど、僕は黄仁俊でそれ以上でもそれ以下でもない。確かに漢民族ではないけれど、沢山の民族がお互いに尊重しあう中国出身だよ。」彼の言葉は私の中でぐるぐると渦巻いていた灰色の感情を一気に真っ白なものに変えた。そもそも、何人か、何民族であ

るかなど関係なかったのである。むしろ、大切な事とは何民族であろうとお互いを尊重しあい理解する精神なのである。そして、これが中華人民共和国という国が長い歴史を経て築き上げてきた教えなのである。このことに気づいてから、私は自分のアイデンティティーに自信を持ち、毎日をポジティブに生きるようになった。

高校3年生になった私は今日も黄先生の中国語の授業を終え、帰路に就く。食事をとり、パソコンを開き勉強に取り掛かる。21時から私に希望を与えてくれた彼が中国語でラジオを行うため、流しておこう。21時55分になった。今日もあの言葉を聞いて明日から頑張っていこう。明天见！拜拜！

「待っていてくれる人」

創価大学
文学部人間学科4年
服部 大芽

あれは去年の秋くらいだろうか。私は日本から遠く離れた武漢という地で、不思議な安心感を覚えた。周りは全て中国語、外国の地であるのには変わりはない。でも、なぜか居心地が良く、周りには多くの友人がいて、なんだか自分の故郷にいるような感じがした。

時は戻り、2019年2月13日。私は武漢の天河国際空港にいた。肩書はこれから武漢大学に交換留学する1人の大学生。旅立つ前の留学への胸の高まりはどこに消えたのか。気持ちは、かなり不安だった。なぜなら留学の状況はこうだ。「言葉:通じない」、「友人:一人もいない」、「場所:行ったことない地」。まるで島流しのようにも見える。だが、1年間の留学生活を経た時の私は上記の3つの状態がこう変化する。「言葉:人と人とを繋げる」、「友人:心優しい中国の友」、「場所:第2の故郷」。どう心境が変化したのか、それには離れた土地で日本人を待っていてくれた武漢の中国人との出会いがあった。そんな、中国に魅せられた1人の大学生の物語。

2019年2月末頃。武漢大学の国際学生寮で私は頭を悩ましていた。中国生活も半月が過ぎ、だいぶ慣れてきた。炒饭や武漢名物の熱干面、ご飯はとても美味しい。生活に苦労はなかったが、1つ問題があった。それは、中国人と出会いがなく、中国人の友人が一向にできないのだ。寮は皆外国人。中国語を学ぶ私たちはクラスメイトも皆外国人だ。気づいたら知らない国の「こんにちは」や「ありがとう」をたくさん言えるようになっている程である。

そんな時、日本人の友人から誘いを受け、中国人の通う日本語教室に行くことになった。友人は日本の大学生事情を発表し、中国語をあまり話せない私は特技のけん玉を披露した。その時の彼

らの反応の大きさは衝撃だった。けん玉の剣に玉が刺さった時、彼らはワーツと声を大にして、大いに盛り上がってくれた。中国人は恥じらいとかを見せず、自分の思いを素直に表現してくれると思った。何だか心が温かくなった。それは 10 分くらいのことだったが初めて中国人と心がつながる瞬間を感じた。そして、その瞬間がこれから出会う中国人との交流のきっかけになる。

中国人との最初の出会いを得た私は、その後日本語教室や日本語学部の授業に引っ張りだこになって呼んで頂き、合計 10 回の日本文化を紹介する講演会と、中国人学生と日本人学生の交流会を 4 回開く機会を得た。更には、日本人の開くカレー屋さんで開かれるリーダーとなり、毎週月曜日と木曜日に学生だけでない日本に興味のある中国人社会人もまぜた交流会に参加していった。そこで出会った中国人は 800 人を超える。

その時私は確信した。武漢は日本人の留学生が 30 人程の少ない都市だ。でも、そこには日本に興味を持ってきている人がたくさんいる。交流会では初めて日本人と会ったと喜んでくれる人や、実家に招待してくれた人もいた。日本にいては気づかないが、中国の武漢という遠く離れた地で、私たち日本人を待っている人がこんなにもいるのだ。私は彼らと出会うことがこの留学の使命かと感じた。そして、その出会いは私にいつまでも心に残る温かい思い出を作り、居場所を作ってくれた。

2020 年 1 月 18 日、私は武漢から日本に帰国した。幸いにも予定変更なく無事に日本に帰国できたが、その 5 日後コロナのために武漢が封鎖された。武漢の友が心配だった。そして武漢に対する世間の目も心配だった。武漢は 1 人の日本人を温かく迎えてくれる優しい地だ。だが、私に出来ることは武漢帰国を心配された時、大丈夫と言うとともに、武漢は良い場所だったということだけだった。ただ、早くこの状況が落ち着き、武漢を始め中国と日本がお互いに笑顔溢れる交流が再開することを希望する。私もまた武漢に行く。今こそ手を結んで全世界協力するときだ。我们一起加油吧！

わたしと中国：中国で研究したい理由

日本大学
大学院商学研究科博士後期課程 1 年
根本 萌希

中国と聞くと、我々は何のようなイメージを思い浮かべるだろうか。おそらくメディアによって作り出された中国像が先行して思いつくことだろう。また、そのようなイメージから中国の実態を知ることなく、こうと決めつけて一蹴する人もいるかもしれない。

現在、私は日本の大学院で日夜研究に従事している。そして、中国への留学を志望する者であ

る。私の専門分野である会計領域では、欧米を志向する研究者が多くいる反面、中国を志向する人は相対的に少数である。実際に中国へ行きたいと話すと、「英語圏の方が良いのではないか」という意見をいただくことがある。会計という学問の成り立ちから考えると、欧米へ行くべきと言う意見が多くなるのも十分に理解できる。ではなぜ私が中国への留学を志望しているのか、その理由をいくつか述べていきたい。

周知の通り、中国は名目 GDP 世界 2 位の経済大国である。人口面で見ても、中国は約 14 億人と日本とは比較できない規模である。都内の中堅私学に位置する我が大学院では、博士前期課程の実に 90%以上が中国から来た学生である。博士後期課程の学生を多く有するとある国立大学においても、半数以上の学生が中国出身であると漏れ聞いている。中国が純然たる学歴社会であることを差し引いても、その勉学に対する意欲は驚くばかりである。留学生の友人との会話の中で、「学覇」という興味深い単語が出てきた。成績優秀な人、優等生と言うような意味合いのようだ。勉学の覇者とでもいうべき学覇という単語を初めて聞いた時、その言葉の響きに強い衝撃を覚えた。日本では、中国語の学覇に相当するような単語を聞いたことがない。そのような言葉が生まれた背景として、名門大学(いわゆる名牌大学)に入るための苛烈な競争があるという。言わずと知れた「高考」である。日本ではしばしばセンター試験のようなものと説明されるが、その制度は複雑かつ一発勝負であることを考えると、安易にセンター試験のようなものとは言えない。おそらく私個人が想像しえないような背景を持つ人々が学覇と呼ばれているのだろう。中国のエリート層がどのような人々なのか。ぜひとも交流して意見を交わしてみたい。これが中国留学を希望する第一の理由である。

次に、中国の研究蓄積量が理由としてあげられる。学術データベースである「CNKI(中国知網)」を見てみると、自分の専門に関連する論文の多さにとっても驚いた。日本の学術データベースである「CiNii」での検索結果(同一のキーワード)と比較すると、実に 10 倍もの差が見られた。研究者や院生の数が多いから論文数が多いのは必然であるという指摘がなされると思うが、国をあげて研究に注力しているのは紛れもない事実である。現在でこそ、学問の共通言語が英語だと言われているが、10 年もすれば中国語が共通言語となる可能性も十分にあると考えている。研究に対する熱量を肌で感じたいと思ったのが第 2 の理由である。

第 3 に、中国の政策があげられる。李克強首相が 2014 年 9 月の夏季ダボス会議で提唱した「大衆創業、万衆創新」政策である。この政策により、中国では創業ブームが起こったと聞いている。往々にしてイノベーションが起こる場合、それに付随して何らかの変革が発生していてもおかしくない。一人の研究者として、中国発の新たな経営管理手法が登場することを強く期待している。そして、その手法がどのように発展していくかを身近で研究していきたいという願望も抱いている。これが第 3 の理由である。

私が中国へ留学したい理由は以上の 3 つである。日本では感じられないような強い熱量を中国という国は有していると考えている。米中新冷戦の時代と言われつつあるが、今後は更に中国の動向が注視されることだろう。日中両国の発展に繋がるような研究者となれるよう日々精進を重ねていきたい。

上海の忘れ物 大人になった私の夢

滝本 さやか

「ねえママ、中国語でこんにちはは、ニーハオ、さようならはツアイチェン、じゃあ、おやすみって中国語で何ていうの？」

4 歳になった私の娘がキッチンにいる私に向かって得意気にこう言います。私が中国語を再勉強しはじめてから娘は中国語だけではなく中国関連のテレビニュースに敏感に反応し、「テレビで中国って言ってるから早く観て！」と情報を伝えてくれるというのが我が家の日常風景となってきています。私に少し影響されて 4 歳の娘が中国や中国語に興味を持っていることを私はとても嬉しく感じていると同時に大きな成長を実感しています。幼い娘と学ぶ中国語はとても楽しく新鮮で新しい気づきがあるものです。

私が中国・中国語と出会ったのは今から約 15 年前になります。

「とにかく中国語！」と皆に薦められて第二外国語として履修したのがきっかけでした。授業でお世話になった中国人の先生の発音がとても美しくてすっかり魅了されてしまい、それから私の学生時代は中国語なしでは語れないほど思い出の大部分を占めることとなりました。

語学学校や中国語サークル、国際交流など色々と中国を身近に感じることでしたが、中でも一番の思い出であり、大人になった今の私の“忘れ物”でもあるのが、中国上海への短期語学研修での経験です。

あの頃の私は自分でも驚くほど積極的で中国のことをもっと知りたい、将来は好きな中国語を使って仕事をしたい、と強く思っていました。しかし、帰国し暫くして就職活動がスタートしました。いつまでも学生でいることが悪い気がして就職先を決めて早く社会人になりたいと思う気持ちがあり、“一時的”に中国語のテキストは閉じようと思いました。後で考えるとまるで上海に“忘れ物”を置いてきたかのような感じがしてなりません。

その後の私は会社員として働き中国語のことはどこか頭の中にあいつつ、現実として結びつかず時間が経過していきました。

結婚後は子育てと向き合うようになりました。日々成長していく我が子を見てみると、ふと、あることを思うようになりました。「こどもは成長しできることが増えてやがて目標をみつけていく、じゃあ私はどうなるの？」私は色々なケースを想像してみました。子育てが一段落したら趣味をする？孫を育てる？いや、まだまだやり残したことがあるはず！！

その日の夜のうちにしまいこんでいた中国語のテキストと CD を出し CD を流してみると、そこに存在していたのは懐かしくも全く変わることなく美しいままの中国語の音。あたかも私にまた聞いてもらうのを待っていたかのような音だったのです。

「これだ！私は中国語で今から夢にチャレンジする！」

その日から私の中国語の再勉強がはじまりました。今度は語学だけではなく元々興味があった京劇ついて調べたり、中華料理を作ったり、幼稚園で中国出身のママと知り合いになり子育てについて話したり、なんだか学生時代より幅が広がって中国や中国語が私の日々を充実させてくれていたみたいです。

そんな毎日の中であの数週間の上海研修で熱心な先生が教えてくださった言葉をたびたび思

い出しています。

「世上无难事，只怕有心人」

自分に志さえあればこの世に難しいことはない。

私は今すぐに学生になることはできないけれど志さえあれば自分の目標を明確に持ち夢を叶えることができるはず。

現在私は中国語通訳ガイドを目指して勉強しています。いまできる限りの時間を使って子供の成長をみつつ、私も中国・中国語で成長していきたい。何歳になっても語学を学ぶこと、中国という国を知り、中国語を勉強することの素晴らしさや楽しさ、また大人だって夢を叶えたっていいんだよ！ということもゆくゆく、我が子に伝えていけたら良いなと思います。

そして近い将来“上海に忘れてきたもの”を今度は通訳ガイドの仕事を通じて必ず取りに行きたいです。

与えられて、与えられた

京都大学

経済学部経済経営学科(今年卒業)

古賀 裕也

僕には大切な人が2人いる。

1人は僕に“与えてくれた”寧波の恋人、もう1人は僕が“与えられた”きっかけを作ってくれた上海の親友だ。

今回はその2人についてお話ししたい。

僕と中国の最初の出会いは、父の仕事の関係で上海に行った中1だ。

正直初印象は悪かった。

商売人は僕の服を容赦無く引っ張ってくるし、中国語もよく分からず怖い。

僕は一刻も早く日本に帰りたいし、一生関わることは無い国だとさえ思った。

事実は小説より奇なりとはよく言ったものだ。

中1の僕は、まさか大学で中国の女の子に恋するとは夢にも思わなかった。

大学2回生の冬、僕は友達から依頼を受けた。

中国人のクラスメイトと共に、日本人にインタビューしたいから僕に出演して欲しいとのことだ。

僕は何の気なしに承諾した。

当日部屋の扉を開けた瞬間、長髪を優雅になびかせる女の子に僕は目を奪われた。

それが恋人との出会いだ。

彼女と付き合い始めたことで、僕の意識は大きく変わった。

「もっと彼女の故郷について知りたい、中国の人と話してみたい！」そう思い始めたのだ。

僕はこれまで中国に無関心だった。

しかし彼女や彼女の友達と仲良くなるにつれ、中国の文化や人々に加速度的に魅了されていった。

何よりも目をキラキラさせながら自らの夢を語る彼女達は、僕がこれまで一度も出会ったことがない類の人であり、衝撃だった。

僕には無いものを彼女達は確かに持っていたんだ。

彼女達と出会って1ヶ月目。

僕は中国語への挑戦を決意した。

しかし彼女達は日本語が話せる。それなのになぜわざわざ中国語を勉強しようと思ったか？

「彼女達と直接触れ合い、心から寄り添える関係になりたい」そう思ったからだ。

これまで会話はできるが、彼女達の真意を十分に理解できているとは言い難かった。

また僕としても伝えきれないことが多々あった。

ならば僕が彼女達に寄り添えば済む話だ。

中国語は予想以上に難しく途中何度も挫折しかけたが、彼女達の支えもありなんとか必死で頑張ることができた。

中国語教室にも通い始め、大学の中国研修プログラムにも参加した。

その甲斐あってか僕の中国語はみるみる上達し、一年足らずで HSK5 級も難なく合格できた。

そんなある日、僕のサークルに上海出身の留学生が入った。

しかし彼は日本語が殆ど話せず、サークル内で孤立していた。

「僕の中国語はまさにこの時のためにあるんだ！」

そう思った僕は、積極的に話しかけた。

みんなが彼を無視しても僕は真っ先に彼と話し、いつの間にか親友になった。

そんな僕と彼の様子を見て、徐々に他のメンバーも彼を受け入れるようになった。

ただそれでも他のメンバーと彼との間にはなんとも言えない距離感があった。

ある日その原因に気づいた。

メディアの影響による中国人への偏見だった。

「中国人は日本人とは分かり合えない、別人種だ」

こんな偏見を他のメンバーは口には出さないが、心の奥底で持っていたのだ。

「悔しい、なんとかしたい」

そう思った僕は、春休みにサークルのメンバー全員で彼の実家に遊びに行く、というプランを企画した。

表面的には単なる旅行だ。しかし僕の胸中には、ある一つの思いがあった。

「彼の家族や友達と直に交流することで、彼らの中国への偏見を無くしたい！中国を好きになってもらいたい！」

結果は大成功だった。

僕たちは彼の母親や兄、友達から歓迎され、一緒に色々な場所に出かけた。

帰国後、僕はメンバーにどことなく中国の印象を聞いてみた。

彼らは満面の笑みでこう言った。

「中国ほんまに好きになった！」

涙が出るほど嬉しかった。

恋人と出会い、僕の中国への偏見は無くなった。それどころか僕は中国が大好きになった。

親友と出会い、今度は僕が仲間に正しい姿を発信し、彼らを変えることができた。

恋人から僕は新しい世界を“与えられて”、親友との出会いを通し今度は僕が仲間に新しい世界を“与えられた”のだ。

その時、僕は紛れもなく“架け橋”だった。

第三の文化圏はすぐそこに

株式会社リクルート

笠井 光

螺螄粉を食べながら、中華ドラマを見る。最近の毎朝の日課だ。

日本に住んでいると、普通に生きているだけで、二つの大きな文化に接していると思う。一つは日本文化。言語から生活文化まで、もちろん日本は日本文化で出来ている。もう一つは欧米文化。学校ではみんな英語を勉強し、当然のように欧米の音楽を聴き、映画を見る。欧米ブランドのファストフードには、老若男女が並んでいる。

世界には、多くの国があってそれぞれの文化がある。中でも、多くの人が所属し、歴史が深く、影響力も強い文化の一つが、中国の文化だ。そのことは、みんな知っている。日本には、多くの中国人が住んでいて、中国人のコミュニティが出来上がっている。それもみんな知っている。しかし、こ

んなに大きな文化が身近にあっても、実際に身近に感じ、肌身に触れている人は少ない。

五年前、東京で大学に通っていた僕は、みんなの中の一人だった。そんな僕が、たまたま知り合った中国人留学生との出会いから、突然、三つ目の文化圏に足を踏み入れることになる。

知り合って間もなく池袋の雑居ビルにある中華料理店に連れて行かれた。店内には中国語のみが飛び交い、「マーラータン」という麺料理が出てきた。衝撃的な美味しさだった。ラーメンの汁は絶対に飲まない派の僕が、スープを飲み干した。それから上野や錦糸町などの中華料理店にも足を運んだ。中華料理店は中国の各地方料理に特化して提供している場合が多く、全て違って全て美味しい。どうやら中国は地方ごとに料理文化もかなり違うようだ。よく探すと、東京ならだいたいどの駅にも、日本に住む中国人向けに中国人が経営する中華料理店が見つかる。螺蛳粉、涼皮、肉夾馍、剁椒魚頭、鴨血粉絲湯、熱干面。日本語はわからない。中国語を勉強したことのない僕だったが、カタカナとアクセントのメモを握り、注文を繰り返していたら、料理名だけは四声も完璧に発音できるようになっていた。

ある日、インターネットで偶然、中国人歌手の歌声を聞いた。素晴らしかった。よく考えると、世界で一番人口の多い国で、素晴らしいコンテンツが欧米と同じくらい多く生み出されているはずなのに、あまり触れたことがない。調べると、大量に見つかるが、日本語になっているものが少ない。やっつのことで日本語字幕がある歴史系ドラマを見つけた。日本でも欧米でも見たことのない演出・ストーリーで、食い入るように毎日見た。全て見終えた翌日、僕は中国語の勉強を始めた。毎日勉強を続け、最近少しずつ字幕を読めるようになってきた。

中国語を読めるようになってきたおかげで、僕が住んでいるマンションの中国人グループで構成される WeChat グループに入れてもらった。マンションの住人でグループを作っていることにも驚いたが、なんと 70 人以上の人が所属していた。そこでは、子供のいらなくなったおもちゃを譲ったり、誰かがまとめて買った食材を分け合ったりしていた。話では聞いたことのある「隣人関係を大事にする中国の文化」を初めて体感した。

ずっと日本に住んでいて、日系企業で働く僕だけど、今は 3 つの文化圏に触れて生きてると実感する。どれが抜きに出て好きというわけでもない。日本の深夜バラエティも、アメリカのリアリティーショーも、中国の古装劇も全部好きだ。一つ言えるのは、昔より自分の世界が広がっている。第三の文化圏はすぐそこにある。周りには多くの中国人が暮らしている。きっかけさえあれば、触れられる。実は、日本という国はそういう環境なのだ。

昨日、いつも行く中華物産店に新しいブランドの螺蛳粉が入荷されていた。明日の朝も螺蛳粉を食べながら、中華ドラマを見よう。

中国人留学生の劉さんへ

聖心女子大学

現代教養学部教育学科教育学専攻

伊東 美咲

私が書いた作文が、巡り巡ってある女性のもとへ届いて欲しいと思い、拙い文ながら書かせて頂きます。

私は、大学に入ってから第二外国語として中国語を専攻し、今は学び始めてから一年半になります。なぜ中国語を選んだのか、それは、中国語がこれからの時代とてもグローバルな言語になるのではないかと思ったからです。大学生になってから都内にあるしゃぶしゃぶ屋さんで働き始めた時、ある中国人留学生との運命の出会いがありました。その方は劉さんと言います。私のアルバイト先は、何故だか日本人よりも、中国、ミャンマー、フィリピンなど外国籍の方が多く在籍しており、新人の私を指導してくれたのも、中国人留学生の劉さんでした。彼女は、まだ一年半しか日本に住んでいないのに、日本語がとてつもなく流暢で、私が困っていればすぐに「ここはこうやるんだよ」と優しく教えてくれたものです。私は劉さんに手取り足取りアルバイトの業務を教えてもらい、彼女は 30 歳で、当時 19 歳の私と 11 歳も離れているにも関わらず、フィーリングが合い意気投合し、段々と仲が良くなりました。アルバイトの時間の外側でも、私が、「明日中国語のスピーキングのテストなんだけど、どうしよう、上手くできるかな？」というと、「大丈夫だよ、今やってみて」と言い、私のたどたどしい中国語のスピーキング練習に付き合ってくれ、アドバイスをくれたりしました。また、「あなたは私に中国語を教えて、私はあなたに日本語を教える。どう？」と提案され、LINE も交換し、宿題でわからないところがあればすぐに彼女に LINE を送り、教えてもらう事が出来ていました。勉強のこと以外にも、劉さんの可愛い猫のことだったり、お互いの好きなゲームだったり、好きなアーティストについて語り合いました。劉さんの猫は、真っ白で毛並みがふさふさしていて、まるで劉さんのようにとても可愛いです。アルバイトの休憩が被ったときはいつも、意地悪な社員さんのものまねをして笑いあったりしていました。あの頃は劉さんのおかげで、アルバイトに行くのも毎回本当に楽しかったです。大学二年生の夏休みに、中国に旅行に行くついでに劉さんの家に行く約束も交わしていました。それを私はすごく楽しみにしていたのに、でも、劉さんはある日突然アルバイトに来なくなりました。他の従業員の方に劉さんの行方を聞いても、だれもわからないとのことでした。LINE を送っても一向に既読がつかないのです。毎日毎日とても心配でした。それは後々知った話ですが、劉さんは重い喘息をもっていて、症状を悪化させ中国に戻り、その後はどうなっているのかだれもわからないそうです。

中国語を勉強していたおかげで、劉さんとの間に「お互いの国の言葉を学ぶ同士」という共通点が生まれ、円滑にコミュニケーションを取れるようになったことはとても嬉しかったです。劉さんとの練習のおかげでいつも中国語のスピーキングテストでは、良い評価をもらうことができたし、もっと中国語や中国についての文化を学ぼうという意欲が芽生えていました。それなのに、急にいなくなってしまって悲しいです。

叶うのなら、またもう一度劉さんに会いたいです。しかし、2020 年に世界中で流行した「新型コロナウイルス」で、またその夢が遠のいてしまったように思います。劉さんが重い喘息もっているのなら、新型コロナウイルスにかかって重症化しないかとても心配です。どこかで元気にしてしてくれたなら

本当に嬉しいです。

今は世界中が新型コロナウイルスによって、当たり前の日常が送れなくなってしまうと思います。こんな時こそ、私たちは一致団結しなければなりません。中国と日本、手と手を取り合ってこのウイルスから身を守り、山を乗り越えましょう。

塗り固められた日本人の意識

同志社大学
法学部法律学科 4年
有田 穂乃香

「僕は中国が大好きでね、休みの日は中国語を学び、最近では中国楽器の練習を始めたんです♪年に二回中国旅行へ行くのも恒例行事です！」

高校時代、担任の先生は頻りに中国の魅力を語っていたが、その頃の私には先生の気持ちが理解できなかった。いや、きっと私だけじゃない。クラスのほとんどが同じ気持ちだっただろう。「中国ってなんか嫌な国」私たち子どもの頭の中には、そのような意識が植え付けられていた。

その要因の一つに、メディアの報道の偏りが挙げられる。日本で取り上げられる中国の情報は、大気汚染・食の安全性・訪日中国人のマナー・領土問題を含む政治対立など…現代人は入ってくる情報を疑いもせず、その一部分を切り取って拡散し非難する。何を隠そう、私もメディアに踊らされていた一員だった。

私に転機が訪れたのは、大学 1 年生の頃だ。第二言語として中国語を学び始め、講師や留学生など中国人と交流する機会が増えた。「中国人は自己中でマナーが悪い」という固定概念とは裏腹に、彼らは日本の文化・習慣をよく理解し、日本をこよなく愛しているという印象を受けた。

私には小さい頃からの夢があった。それは、ジャーナリストとして日本全国に正確な情報を届けることだ。しかし、私が日常生活で感じる中国と報道される中国のイメージのギャップが強くなり、何かを批判する前にまず自分の目で見てみたいと考え、私は北京への半年間の留学を決意した。

初めて足を踏み入れた大国・中国…そこには私の想像をはるかに超える景色が広がっていた。シェアバイク・外食デリバリー・ネットショッピングの普及、QR コード決済、手荷物検査、広大なキャンパス、胡同を含む数多くの歴史的建造物や観光名所…一辺倒な情報で塗り固められた私にとってはすべてが新しい世界だった。

学内で出会った現地の学生は、日本のアニメやアーティストについて私よりも詳しく、ドラマの感想もよく語り合ったものだ。また、街の至る所で日本製品を見つけ、日本製であることの安心感も購買力の強みになっているのだと誇りに感じた。店員さんや街で出会った中国人は、私が日本人だと分かれば「こんにちは。日本が大好きで行ったことあるよ」と話しかけてくれたことも複数回ある。わずか半年間の留学で、フレンドリーで心優しい中国人と数えきれないほど出会い、感動と刺激の毎

日だった。次第に私は中国という国にのめり込んでいった。

留学開始から3か月後、私は高校時代の先生に勧められて七三一部隊の遺跡資料館を訪れた。そこには残虐的な記録が残されており、一生忘れることのできない恐怖や衝撃を感じたと共に、今まで知らなかったこと自分に対して恥ずかしくなった。日本人は中国に対して根拠もないマイナスイメージを持つのに、戦時中日本がしてきたことは知らないということにも深いもどかしさを感じた。この両国間における好感度のギャップはどのようにして埋めることができるのだろうか…

中国——それは、歴史的にも地理的にも近い国。しかし、どこか遠い国。「中国人が日本を嫌うから、日本も中国が嫌い」という潜在意識が間違っており、今は両国における意識改革が必要だ。私が言いたいことは「中国を好きになってほしい」ということではない。迅速な情報伝達が可能なこの現代において、情報を何でも鵜呑みにしない方がいいということだ。自分の目で確かめてもいないのに、上辺の情報を信じ込み、それを拡散していく。世界は広くなったようで、実は何も繋がっていない。新型コロナウイルスが流行している今、むしろその差は大きくなり溝は深まっていく。私自身、たった半年間では中国のリアルなど分からなかった。しかし、将来ジャーナリストの立場として、ありのままの姿・歪みのない情報を伝えることで、日中の架け橋になることができると信じている。

最後に問います。根拠のない偏見を持つ前に、あなたは中国の何を知っているのですか？